



証

細野豪志

「原発危機500日」
の真実に鳥越俊太郎が迫る

言

細野豪志

Goshi Hosono

×

鳥越俊太郎

Shuntaro Torigoe

講談社

まえがき

鳥越俊太郎

まず正直に語っておきたい。

この本は私の発案でできあがったものではない。本の基底となっている合計十時間以上に及ぶインタビューは、福島第一原発事故発生当時、総理大臣補佐官だった細野豪志衆議院議員（現・原発事故収束・再発防止担当・内閣府特命担当（原子力行政）・環境大臣）からの依頼によってスタートした。

二〇一一年三月十一日の東日本大震災と、それに伴う福島第一原子力発電所の事故については、震災から一年に当たる二〇一二年三月十一日前後に新聞、テレビ、週刊誌、インターネットなどあらゆるメディアが検証を行った。そこでは政府関係者をはじめ、東京電力の本社と現場関係者、被災者、学者、研究者などさまざまな人々が「あの日」のことを語っている。

しかし、ここで強調しておきたいのは、いづれもメディア側からの求めに応じて口を開いているのであって、「自発的」発言はほとんどないに等しいことだ。メディアが報道機関の使命として取材をし、検証結果を伝えるのは当然のことなのだが、私がここで注目したいのは、取材される側は常に受け身であることだ。自ら進んで事実関係を明らかにした人は残念ながら皆

無である。

少し話を広げて、政治家が記録を残すことは——たとえば回顧録や回想録の類は、日本でもその例はある。しかし外国の政治家の回顧録の多くが歴史的文献資料として意味を持つのに比べると、日本の政治家のものは、自分に都合のいい部分だけを書き遺す「宣伝臭」が強いように感じられる。

したがって日本の政治家の伝記たぐいの類は、歴史的な参考文献としては使えないものが多い。欧米の政治家の回顧録と日本のそれとの根本的な差異は、歴史に対する責任の有無という点にあるように思える。

今回、細野氏の依頼に答えて私がインタビューを行い、それを一冊の本として上梓することに同意したのも、常日頃から私が歴史に対する責任や使命感を感じていたからに他ならない。

そういうわけでインタビューは、まず細野氏の存念を問いたすところから始まることとなった。この部分は本文中には含まれていないので、この「まえがき」に収録し、読者の理解を求めたいと思う。

鳥越

最初にですね、原発事故の経緯に入る前に伺っておきたいことがあります。この話は細野さんのほうから、僕に依頼があった。つまり、話をしたいという依頼を僕が受けたわけですが、細野さんの気持ちとして、なぜ話をしたいという気になられたのですか。

細野 おそらく今回の原発事故は、非常に深刻な事態として、日本人の、いや世界中の人々の記憶にとどめられる事故であり、社会のあり方や政策にとつても、大きな転換点になるものと受け止めています。間違いなく歴史に残る大きな出来事です。だからこそ、できるだけ正確に残すべきだろうと思っただんです。こうした記録が残れば、場合によっては私も含めた政府関係者が後世から厳しく批判される、もしくは糾弾されるということがあるかもしれない。いまの民主党政権に対しても厳しい評価を得ることにつながるかもしれない。けれどもそういう次元の話ではなくて、歴史的にきちつと残すべきではないか。そう考えたことが第一の動機です。

昨年からこれまで、場面場面において必死に考えて、いろんな判断を下してきました。ただ、走りながら考えて来たので、どこかで残さなきゃならないと思いつながら、その機会がありませんでした。震災から一年以上が過ぎましたし、そろそろ記憶が曖昧あいまいになる。残すべき時機だと思っただんです。

鳥越 日本の政治家は、これまで見ていると、歴史に対する責任感、使命感がいま一つ欠けていて、自分の言動を記録として残していかない。墓まで持つて行ってしまおう人が多いですね。欧米の場合だと、わりと正確に回顧録として残していくんですけれども、日本の場合は、自分の都合のいいような回顧録はあっても、事実を正確に述べて、客観的に後世の歴史の判断に委ゆたねるという習慣がありませんね。

そうしたなかで今回、細野さんがご自分の体験を歴史に残す決断をされたことを、僕は大変素晴らしいことだと思っています。思っていますか、どうですか、すべてを言えますか。言えないこともありますか？

細野 自分の都合のいいことだけを言うのはフェアでないし、正確な歴史とも言えません。ですから、できる限りのことをお話します。

ただ自分のなかで、迷いはあるんです。事故当初、私は総理の補佐官でしたから、決定権者ではなかったんです。自分の意見——たとえば、この局面はこうすべきではないかという考えはできる限り発言してきましたが、必ずしもその通りにならなかった場面もある。

その一方で、決定を下した責任者は、必死になって考えて、自分が責任をとる覚悟で判断をしています。ですからその決定に対して、あるとき私はこう思ったんだけど、こうなってしまう、というふうに誰かに責任をなすりつける形で発言するのは、私の気持ちとしては、ストンと落ちない。そのところをどのようにお話したらよいかという逡巡しゆじゆんはありますね。

鳥越 その点については、実際にはこういう決定になったけれども、細野さん自身はこう思った、という表現はありえますよね。

細野 そうですね。そういう表現の仕方はあると思います。

鳥越 現実はどう進んだけれども、自分の気持ちのなかではこう考えていた。そこはぜひ話してほしいですね。

細野 一つ留保すると、私は自分が行った判断のなかでも、これは本当に正しかったんだらうかと、まだ結論を出せていない部分もあります。そこは正直にお話ししようと思うんです。ただ歴史の評価というのは当然ながら、一人の主観だけで行われるべきものではなくて、複数の証言のなかでなされるべきものだと考えています。だから私が絶対の事実を知っていて、自分の考えがすべてだとは思っていない。そのことだけは……。

鳥越 わかりました。

それからもう一つ。なぜ僕を選ばれたんでしょうか？ インタビューアーには、他にもいろんな選択肢があつたと思うんですが。

細野 はい。それはご説明したいと思っていました。迷つたんですよ、どなたにお話するのがいいのかなと。いろんな方の顔が頭に浮かんだんですけど、最終的に、鳥越さんに、と考えた。

政治家である以上、私は歴史の法廷にいつかは立つと思ってきました。「歴史の法廷に立つ」というのは中曽根（康弘）元総理がおっしゃったことですが、私はそれを聞いて、ああ、そういうものなんだなと思つて、その覚悟を持つてやってきたつもりです。で、いまがまさにその場面だと考えている。

ちよつと話は飛びますが、私、一年生議員のときに国会で質問して、仙谷（由人）さんに呼び止められたことがあつて。こう言われたんです。仙谷さんは雲の上の存在で、話す機会もな

かったんですけど、「細野君、君の質問は悪くない」と。「悪くないけど、一つ足らんものがある」と。「何ですか」と訊いたら「お前は念が入っておらん」と。

鳥越 「念」って、「思い」という意味ですか。

細野 思いですね。何のための質問なのか、誰の立場に立ってやっているのか、何をめざしているのか——こういうことが明確な人間は、にじみ出るものだと。で、「お前の質問は、上手に言っておるし、たくさん知識も集めているのかもしれないけど、念が入っておらん」と。「それが入れば、まあ、という質問をしておるわ」と。

この仙谷さんの一言は、政治家としての転機になりました。これは何も質問に関してだけじゃなくて、判断を下す場面とか、厳しい局面に遭遇したときなど、政治家のすべてに通ずることです。

それで、ジャーナリストの方にも、そういう「念」があつてしかるべきだと思うんです。個別の政策に対する考え方は私と違うかもしれませんが、全体としてにじみ出てくるものが、鳥越さんからはあると感じていたんです。それは使命感と呼んでもいいかもしれませんが。そういう使命感を持っている人に、私なりの使命感を持ってやってきたことを話したいと思つたわけです。

後は本文をお読みいただきたい。仙谷議員に直言され、細野氏が政治家としての転機になつ

た、と述懐するキーワード「念」―細野氏の思いや覚悟が、十分に伝わる対談になったと思っている。

ただ本文に入る前に読者のみなさんと再確認しておきたいことがある。それは「あの日」（二〇一一年三月十一日）以来現在に至るも日本中いや世界中に衝撃を与え続けている、原発危機の意味や重さについてである。

東日本大震災によって引き起こされた福島第一原子力発電所の事故は、人類が受けた「核の被害」という視点で見ると、もちろん初めてではない。核兵器の開発・実験途上で太平洋上や中央アジアの平原で人々が被った被害は数え切れないほどある。ヒロシマやナガサキでの原爆投下は言うまでもなく人類が歴史上初めて経験した「核の受難」であった。

しかし、それらはいずれも人を殺傷・破壊するのが目的の兵器である。人的被害は計算されたものだと言っても過言ではないだろう。

それに対してスリーマイル島（アメリカ）、チェルノブイリ（当時ソ連、現・ウクライナ）、福島とつながる原発クライシスは、核分裂エネルギーの平和利用、言い換えれば電力という現代文明を支える基本的な仕組みのトラブルに起因しているところに問題の深刻さが潜んでいる。

地球上でもうこれ以上同種の厄災を見ないですむことを願うしかないのだが、今回の福島第一原子力発電所を襲った事故は核分裂という作業の恐ろしさを私たちに思い切り突きつけた。地球上に今後も原子力事業が継続していくことを考えると、これで終わりという話ではないだろ

う。

その意味でも私たちは今回の福島原発クライシスで何を見たのか。しっかりと検証し、教訓を次世代に、また他国へと引き継いでいかなければならない。

今回私が冒頭に記したような経緯で対談することになった細野豪志氏は事故発生当時、総理大臣補佐官として政権中枢部にいた人物である。さらに同氏は直後にできた東京電力福島原発事故対策統合本部の事務局長的立場で東京電力本店に常駐し、事故の収束のため文字通り寝食を忘れて力を尽くしている。読者も周知のように細野氏は原発事故収束・再発防止担当大臣として、また環境大臣として、最前線で指揮を執ってきた政治家でもある。

私が対談相手をして覚えた驚きは、細野氏は事故当時、まだ「不惑」のよわい齢をも超えない、三十九歳という若さ、私から見れば息子くらいの年齢であったことである。

自民党から民主党へ政権交代が行われたことで政権の責任あるポストに就く政治家が全体に若くなったことも背景にあるだろう。その点では細野氏の若さに驚くこともないのかもしれない。

実は私の正直な本音を言うと、単に若さに驚いたのではない。私が対談を通じて最も衝撃を受けたのは、日本にもこんな政治家がいたのか、という新しい発見であった。

細野豪志という人物は、一言で表現すると、常に、そして何事に対しても、「真摯しんしな」人間であろうと腹を据えている男である、ということにつきる。

この本を最後まで読んでいただければ、この表現が私だけのものではないことは理解してもらえると思っている。

立ち読みデータはここまでです。
続きはぜひ、書店さんでお求め下さい。



Amazonでのご予約・ご購入はこちら

<http://j.mp/shogen-ht>